

中秋節の来歴とその慣習

曹 述 燮

The History and Custom of ZHONGQIUJIE (中秋節) in China

JO, Sulseob

太陽と月の角度からして、北半球での観月に最も良い時節とされる旧暦の八月。この月の満月が浮ぶ十五日を、中国では、中秋節とよび、「夜は、中庭に果物や月餅を盛ったテーブルを置き、月を眺めながらこれを食べ、一家の円満と長寿、作物の豊穰を祈る。」（『中国百科』「生活 年中行事 1」）節日として、韓国では、秋夕とよび、「新たに収穫した新米でつくった飯と酒、ソンプジョンなどとリンゴ・栗・梨などの新しい果実で心をこめて食膳を調べ、秋夕の最初の膳を先祖に供える茶礼を行ったり、先祖の墓参りをしたりした後、綱引き、シルム、ガンガンスルレなど様々な遊びをして楽しむ。」（『韓国伝統文化事典』「4 韓国人の一生と歳時風俗 秋夕 2」）節日として、日本では、「十五夜、または月見とか名月あるいは芋名月といい、縁側に芒の穂と月見団子を飾り、月を眺める。」（『年中行事事典』「秋の行事 3」）節日としてまもられてきている。つまり、八月の十五日は、中国・韓国・日本のいずれの国においても、人々の生活に変化や潤いを与え、一年を豊かに彩っていくハレの日として祝われた大事な一日であった。ところが、それぞれの節日は、そのそれぞれが祝われるに当たる来歴や今日の様子を見せるまでの時代的変遷や特徴を持つと同時に、その祝われる行事の内容においても独自の態を示している。

この論文においては、中国における旧暦八月十五日の民俗節日中秋節を題材にして、各種筆記体文章や小説に描かれている中秋節の記事を総合することによって、その節日慣習の起りやその後の節日として今日に至るまでの時代的変遷の様子、そしてこの日にまもられる民俗行事の内容の詳細などをたどってみることにする。

1. 中秋節

旧暦の八月十五日が中秋節。八月が七月、八月、九月とある秋の三か月の真ん中の月に該当することと、また十五日が一つの月の真ん中の日に該当することからこの日を中秋と呼び、節は節日、つまり伝統的な祝い日、あるいはお祭りの日という意味を持ってこう呼ばれる。

1) 来歴

「中秋節の起りこは、古人の月に対する崇拜である。3000年以上前の周の時代、天子が「春

分の日」の昼に太陽を祭って豊作を祈っていた。それは「春祈」といわれた。また「秋分の日」の夜には月を祭った。それは「秋報」といわれた。……

月を祭るときには、満月でなければならない。しかし、秋分の日は往々にして満月ではなく、新月となって月が見えないことすらあった（例えば、1994～2005年の12年のうち、秋分の日に満月となるのは、わずか2年だけである）。そこで唐代には、月を祭るときが秋分から8月15日の夜に変更された。……

皇帝が月を祭ることは、厳粛な宮廷の儀式であった。しかし、民間に伝わった中秋節は、さわやかな季節の秋に農産物やくだもの豊作を祝い、一家団欒を喜ぶという世俗的な祭り変わった。若者たちは月明かりのもと、踊ったり、恋人を見つけたりして楽しむのである。……」（祭りの歳時記⑧「中秋節⁴⁾」）

「中秋節の8月15日の夜は、中庭に果物や月餅を盛ったテーブルを置き、月を眺めながらこれを食べ、一家の円満と長寿、作物の豊穰を祈る。2000年前の周代に天子が月を祭ったのが始まりで、唐代から民間に広がり、宋代に月餅が流行したという。……」（『中国百科』「生活 年中行事⁵⁾」）

以上、祭りの歳時記⑧「中秋節」、そして『中国百科』「生活 年中行事」の引用記事から確かめられることは、中国における中秋節の起こりが、古く周代（前1100年頃～前256年）から行われていた天子のお祭り「秋報」に求められ、それはもと秋分の日に行われていたものが祭神となる満月を求めて唐代から八月の十五日の夜に行われるとともに、同時期に民間に広がることによって、本来は宮廷の祭事という厳粛な性質から一家団欒を喜ぶという世俗的な祭りへかわっていったとすることである。しかし、中国社会において旧暦の八月十五日が実際みな慣習的節日としての座を占めはじめるのは宋代になってからのことで、その傍証となるのが、次の引用文である。それには、

「八月の十五夜の中秋節は、唐でも観月の記録はみえるが、しかし一般にはあまり興味が持たれていないようであって、寒食や端午の比でない。唐人の小説類にも、玄宗が月宮に入って仙丹を飲んだ話と、周生が雲にはしごをかけて月を取った話以外は、ほとんど語られていない。詩では王建の「今夜の月明人ことごとく望む。知らず秋思誰の家にかあらん」が最も有名なくらいで、杜甫、李白、白樂天、韓退之、柳宗元などにもありはするが、それほど有名でないのは、右の事情によるのである。しかし宋になると唐よりは盛んなようであって、中秋には三公以下の人々が、鏡や承露盤（甘露を受ける銅盤）を献じており、汴州では翫月羹を食っていて、すでに祝日であったことが知られる。晏殊の中秋の詩の「苦吟して翰を含むこと久しく、清宴に樓を下ること遅し」をみると、飲宴の行われたことも分かる。しかし、祠部（天文祠祀などを掌る役所）の祝日の休暇をみると、立秋、七夕、秋分、重陽があつて

中秋がないから、一般の祝日ではなかったようである。……」（『中国社会風俗史』第十七章「祝日⑥」）

とあり、宋代になって、八月十五日の中秋節が、三公以下の人々が鏡や承露盤を献じていたり、地方においては節食をこしらえていたり、宴会を催していたりとされ、この日が中国人の生活習慣のなかにおいて一つの節日として祝われるにいたることが確かめられる。さらに、南朝梁の宗懐によって書かれた、当時一般に行われていた風習を含み、楚国の年中行事を記している『荆楚歲時記』や、唐の徐堅らが奉勅によって撰した、経史文章の要典故事を類聚している『初学記』の「歳時部」など、宋代以前に書かれている風俗書一般において中秋節が節日として祝われている記事が見当たらないことからしても、中国で中秋節が節日化する時期は宋代であると見るのが妥当であるといえる。

2) 宋代の中秋節

「中秋夜。貴家結飾台榭。民間争占酒楼翫月。絲篁鼎沸。近内庭居民。夜深遙聞笙竽之声。宛若雲外。閭里兒童。連宵嬉戲。夜市駢闐。至於通曉。

中秋の夜には、富貴の家ではあずまやを飾り立て、民間では酒屋の楼閣を借りしめて月見をする。管弦の音が湧き立ち、宮城近くの住民は、夜更けまで遠くからの笛の音が聞こえてあたかも天上にいるような雰囲気になる。町の子供たちは一晩中遊びふけり、夜の街も賑やかで朝方まで続く。」（『東京夢華録』卷之八「中秋⑦」）

「八月十五日中秋節。……此夜月色。倍明于常時。又謂之月夕。此際金風薦爽。玉露生涼。丹桂香飄。銀蟾光滿。王孫公子。富家巨室。莫不登危樓臨軒玩月。或登廣榭。玳筵羅列。琴瑟鏗鏘。酌酒高歌。□以卜竟夕之權。至如鋪席之家。亦登小小月臺。安排家宴。團圞子女。以酌佳節。雖陋巷貧窶之人。解衣市酒。勉強迎歡。不肯虛度此夜。天街買賣。直至五鼓。玩月遊人。婆娑于市。至曉不絕。蓋金吾不禁故也。

八月十五日は中秋節。……この夜、月の色はいつもに倍して明るく、このため月夕とも呼ぶ。この時期の良い風はさわやかさをもたらし、潤う露は涼しさをもたらす。木犀の香りが漂い、銀色の月明かりが満ちわたる。皇族の若殿や富貴な家々では高い楼閣に登って月見をしたり、あるいは広いあずまやに上がり盛大な宴席を設け、管弦の音色を響かせて、酒を酌み交わしながら歌を歌ったりし、とびつきり夜通しの歓楽にふける。町の商家のお家においてもちょっとした月見台に上がり、家族のための宴席を設けて子供たちと一緒に団欒を楽しみながら名節をすごす。貧しい所の貧乏人たちも衣装を質に入れて酒を買い、無理をしても歓楽を迎えるもので、この夜を無駄に送ろうとはしない。大通りの商売はずっと朝まで続き、月見をして遊ぶ人たちが市にあふれ出て朝方まで絶えない。警備隊がそれでも取り締まらないためである。」（『夢梁録』卷四「中秋⑧」）

上の引用文は、それぞれ、孟元老によって、宋の南渡の後、北宋の都汴京（開封）の繁華を追懐して書かれた書物『東京夢華録』の中に描かれている、北宋の都開封にて祝われていた中秋節の様子と、呉自牧によって、南宋の郊廟宮殿のことから百工雑技に至るまでを詳細に記している『夢梁録』の中に描かれている南宋の都臨安（杭州）を中心とした中秋節の様子である。まず、前者北宋の都開封で祝われた中秋節の様子を見れば、その夜に、富貴なお家では特別にあずまやを飾りたてて観月を楽しみ、それが許されない庶民はまた庶民として町に出かけて月見を楽しむ。町にはちょうど管弦の音楽が湧き溢れ、夜店が出て賑わいを見せるとともに、子供たちも夜通し騒ぎ、且つはしゃいで過ごすといった今日の町の中秋節の様子さながらの模様でこの日が祝われていることが確かめられる。次に、後者の南宋の都臨安（杭州）を中心とした中秋節の様子を見ても、月見を楽しむこの節日の夜の町の様子などはちょうど北宋の都汴京（開封）での様子とさほど変わっていないものとして描かれているのみならず、また貧民街の貧乏人たちにおける中秋節の日の様子として、彼らもこの晩だけは歓楽を尽くすために服を質に出してさえも酒を買って楽しんでいたこと、さらに、平素は夜間通行に禁制がかかる町の中であっても、この日だけはパトロールに当たる警官隊も夜通し遊びふける通行人を取り締まることはなく楽しませてあげたという特別な日として扱われていたことなどの事実が確認でき、中秋節が宋の人々にとって歴とした節日として祝われていた面貌を捉えることができる。

ところで、これほどまでに賑やかさを見せている宋代の中秋節であるが、それにしても、「祠部（天文祠祀などを掌る役所）の祝日の休暇をみると、立秋、七夕、秋分、重陽があって中秋がないから、一般の祝日ではなかったようである。……」（『中国社会風俗史』第十七章「祝日⁹⁾」）とあるごとき、この日の祝祭日としての重みはまだまだ幾つか他の伝統的節日には及ばないものがあつたようである。

3) 清代の中秋節

「清では端午と中秋は、元旦とともに三節と呼ばれ、当日は商売を休み、職人も仕事を休めているが、その前日には官民ともに服装を改めて祝賀する。端午には粽、中秋には月餅を贈答し、借金もすべてこの五月と八月の両節に清算して、それを節関と呼んでいる。端午と中秋が最も重視されるから、片田舎の小民も必ず酒を飲み肉を食って、元旦と同じように楽しむ。」（『中国社会風俗史』第十七章「祝日¹⁰⁾」）

「京師で八月節というのは、すなわち中秋のことである。中秋になるごとに貴族富豪の家では、みな月餅や果物類をたがいに贈答する。十五夜の満月ともなれば、瓜や果物を庭に陳列して月に供え、同時に枝豆と鶏頭花をも捧げる。このときは皓々たる満月が中空にかかり、雲は始めて散ずるのである。人々は杯を献じ、盞さかんを洗いたがいに酒盛りをする。子供たちは騒々しくはしゃぎまわる。真にいう通りの佳節である。

ただ、月を祀るときは男はほとんど叩頭したり礼拝することを行なわない。だから京師の諺に「男は月を拝まず、女は竈^{かまど}を祭らず」という。」（『燕京歳時記』「八月 中秋¹¹」）

上部、『中国社会風俗史』第十七章「祝日」からの引用文においては、現代中国においても、中秋節が春節、端午節と並んで三大名節の一つと数えられる所以が、ほかならず清代からの伝統に倣っていることがわかる。さらに、澄んだ空気に花咲く季節、そして穀物や果物などの初ものが出る豊かさにあやかって観月の遊びに興じる楽しみから節日化している中秋節が、この時代になると、商売人、職人、そして役所までがともども休みになり、宋代からあったこの節日の始まり以来の賑わいがさらなる賑わいを増していつていることが確かめられる。次に、満州旗人敦崇によって、清代の北京の年中行事や名勝古跡などを記した『燕京歳時記』の引用部からは、生涯の大部分の時間を家庭で送られていた女性たちを中心に、月を拝みてその神からの円満なる生活上の祝福にあやかろうとする中秋節の祭日としての色合いが強く表れていることが確かめられる。

2. 中秋節の民俗

1) 祭日として

(1) 月を祀る

「八月十五日祭月。其祭菓餅必円、分瓜必牙錯瓣刻之如蓮華。紙肆市月光紙、續満月像、趺坐蓮華者、月光遍照菩薩也。花下月輪桂殿、有兔杵而人立、搗菓白中、紙小者三寸、大者丈、緻工者金碧續紛、家設月光位於月所出方、向月供而拜、則焚月光紙、撤所供、散家之人必遍。……

八月十五日には月を祭る。この時に供えられる菓子や果物はすべて丸いもので、瓜はギザギザに刃物を入れ蓮の花の形に切られる。紙を売る店では蓮華の上に満月が鎮座している模様が描かれた「月光紙」が売られる。これは月光遍照菩薩を意味している。蓮華の下には月にあるという宮殿と杵を持って立ち、菓をついているウサギが描かれている。紙は小さいもので三寸（10cmほど）、大きいもので一丈（3mほど）の大きさで、緻密に金色や鮮やかな色彩を用いて描かれている。家々では月の神様の祭壇を月の出る方角に設け、供え物をして、月を拝む。その後、月光紙は焼かれ、供え物をさげ、家人に分け与える。」（『帝京景物略』「中秋日¹²」）

「京師謂神像為神馬兒、不敢斥言神也、月光馬者、以紙為之、上繪太陰星君如菩薩像、下繪月宮及搗菓之玉兔、人立而執杵、藻彩精製、金壁輝煌、市肆間多売之者、長者七八尺、短者二三尺、頂有二旗、作紅綠色或黃色、向月而供之、焚香行礼、祭畢、与千張元宝等、一并焚之。……

京師では神様の画像を「神馬兒」といい、あえて直接に神と指してはいわない。月光馬兒は紙をもって作ったものである。上に太陰聖君（月神）を絵く。その形は菩薩像のごとくで

ある。下に月宮および葉を搗いている玉兔をえがく。玉兔人のように立ち上がって杵を執っている。その絵は美しい色彩を用い、質がよくて、金碧に輝き煌々している。市肆にはこれを売るものが多い。長いものになると七、八尺もあるが、短いものは二、三尺である。その頂には二本の旗があり、色は紅緑あるいは黄に描いている。

月に向かって月光馬児を供え、香を焚いて礼拝する。祭祀が畢ると〔その前に供した〕千張や元宝などをひとまとめに焚いてしまう。』（『燕京歳時記』「八月 月光馬児¹³⁾」）

上部引用の前者『帝京景物略』は、明の于奕正が資料を集め、劉侗が潤色し、崇禎八年(1635)頃になったとする、北京の名勝志で、百二十九箇所について記述し、関係の詩を収めている書物であるが、明代における中秋節の祭日としての様子がとてもよく表れている。まず八月十五日の中秋節は、月の神様にお祭りをする祭日の意義が強い節日。この時に祭られる月の神様は月光遍照菩薩とあって、紙に、蓮華の上に満月が鎮座している模様で描かれた金色燦爛たる画像のもの。これは仏教経典において、月天、つまり月天子は大勢至菩薩の化身であるとする謂れによるものであろうが、別名「月光紙」と呼ばれていた。大きさも様々で、中秋節の時期になれば、各家庭では、紙を売る店に出かけてこの画像を手に入れ、中秋節の当日には月の出る方角に月の神様の祭壇を設け、月餅など丸い菓子や丸い果物を供物として供えて拜んだ。その後、この月光紙は焼却し、供えられていた物は分け合って食したり、あるいは親戚たちで贈りあったりするのである。後者の引用文『燕京歳時記』においては、清代の祭りの様子が記されているが、その大半は明代と同様のものになっている。つまり、「神馬児」または「月光馬」と呼びならわす月の神様を描いた画像が存在し、中秋節の当日に、これを月に捧げて拜んだ後、その画像は祭りのときに一緒に供えていた千張や元宝（神にお供えする紙製のお金）などととも焼却するとあり、月の神様が「太陰聖君」として、その画像が菩薩像に似通う形で描かれたというところなど少々の変化が見えている以外、祭りのおおむねは明代からの慣習をそのまま受け継ぎ守られていることが確認できる。

(2) 俗信的祈願

(中秋節の夜には)漢族の民間においても、中秋節に恋人を見つけるという風習がある。福建省の南平、竜溪の人々は、広場に色とりどりの舞台を建てて、それを月の宮殿と見なしている。夜がふけると、娘たちは幅の広い長そでの舞台衣装をまとい、嫦娥に扮して、青年と対歌(歌垣)を行う。そして、美しい模様を刺繍したハンカチを舞台の下へ放り投げる。それを拾った男性が舞台上がり、ハンカチの模様が娘のものと同じであれば、指輪などの愛のあかしを互いに交換することができる。よく言われる「抛帕子招親」(ハンカチを投げて婿をとる)である。

台湾には、「偷菜求郎」(野菜を盗んで婿を求める)という風習がある。未婚の女性たちは月明かりのもと野菜畑へ出かけ、ネギや青菜を盗む。それによって、思い通りの相手が見

つかることを表している。つまり、民謡に歌われるように「ネギを盗めばよい夫の妻になり、野菜を盗めばよい婿の嫁になる」と考えられているのである。」(祭りの歳時記⑧「中秋節」)

以上の記事からは、中国の各地方におき、中秋節の月明かりのもと若者たちが踊りや盗みなどを縁に恋人を見つけたりして楽しむという俗信を示す内容が確認できる。これは第一、外出して夜遊びが可能であった良き、嬉しき節日に、特別に異性に情を寄せる若者の心情の動きがあつてのことであろうが、その他の要素としては中国民族における縁結びの神様が「月下老人」と呼ばれ、その老人が活動する時間帯が昼ではない夜であることと無縁ではないであろう。つまり、月下老人はちょうど月光の下、生まれる前からこの世で夫婦になる縁で結ばれている人々の名を記している帳簿たる「婚牘」に従い、赤い糸で兩人の足を縛って印をつけて回るわけで、その縁で結ばれているものは家が敵同士であるとしても、身分の上下や遠隔地で離れていたとしても、さらにまるつきり別条件下のもの同士であるとしても終局には夫婦になるという謂れ¹⁴⁾が信じられており、月光の下に働く月下老人と所縁を持つ自分の天の定めし相手を求める若者の遊びが中秋節の夜を用いて行われたりすることで、これは決して人情の自然を離れるものではないとすることができるであろう。

2) 慣習として

(1) 飲宴と観月

「偏に賞す中秋の月、古より如今に到る」。……この時節、秋の空はすがすがしく晴れわたりに、黄昏時になると月が出る。月は鏡のように明るくすみ、木犀の花の香りを帯びた穏やかな風がそよ吹く。家中の者が集まって果物や月餅を食べながら月をめぐる、つまり「一家団樂で月見をする」ことにある。中秋節が別名「団圓節」と呼ばれるわけがここにある。昔も今も、中国の家庭では大体このようなごやかな雰囲気中秋の名節を過ごす。

中国は、土地が広大なため、省によって風習も異なり、中秋を過ごすのに一家団樂で月見をする以外に、その地方ならではのさまざまな行事が戸外でくり広げられる。江蘇省や浙江省の人々は中秋の節日にいろどりを添えるためにたくさんの灯火をともし、月光を助勢して中秋を祝う。ことに浙江（浙江省を流れ杭州湾に注ぐ大河）では、……」（『中国人の生活と文化』 「中秋の名月¹⁵⁾」）

「贾母笑道：“此时月已上了，咱们且去上香。”说着，便起身扶着宝玉的肩，带领众人齐往园中来。当下园之正门俱已大开，吊着羊角大灯。嘉荫堂前月台上，焚着斗香，乘着风烛，陈献着瓜饼及各色果品。邢夫人等一千女客皆在里面久候。真是月明灯彩，人气香烟，晶艳氤氲，不可形状。地下铺着拜毯锦褥。贾母盥手上香拜毕，于是大家皆拜过。贾母便说：“赏月在山最好。”因命在那山脊上的大厅上去。众人听说，就忙着在那里去铺设。……

賈母（ご隠居さま）が笑いながら、「もうお月さまも出たところでしょう。うちらお香をあげ

に行きましょう。」と言いながら、体を起して孫の宝玉の肩に支えられながら、みなの人々と大観園の中に来ました。その時、園の正門は全部開けてあって、大きな羊角灯が吊ってあります。嘉蔭堂前の露台の上には香をたき、雪洞をともし、瓜や月餅、そして各種の果物を供えてあり、邢夫人らの夫人客はみな奥に前から来て待っていました。言葉通り、月明かりと提灯の色合いと、人の気と香の煙とが、その艶やかで煌びやかな雰囲気は形容することができません。地面には拝礼用の毛氈や錦の褥が敷いてあります。ご隠居さまが手を洗って香を上げ拝礼し終えると、みなの人々も拝礼をしました。お隠居さまは、「山の上での月見が一番だよ」とおっしゃったので、築山の上の大ホールの上に行くことになりました。付添いのみなはその話を聞いて急いでそこに行って月見の準備をします。」(『紅樓夢』第七十五回「開夜宴異兆發悲音 賞中秋新詞得佳識¹⁶⁾」)

以上の引用記事から確かめられるのは、中秋節の肝要さはやはり、家中の者が集まって果物や月餅を食べながら「一家団欒で月見をする」こと、つまり豊かに満たされ、明るさを増している満月が浮ぶ十五夜を迎え、人としての生活もその満月にあやかるとごとく人生の豊かさの土台となる家庭から円満で団欒であることを、飲み食いする宴会を開いてともに楽しむと同時にさらにそれを願うことであり、それは今日の人々に脳裏にある中秋節のイメージと合致するものであるといえよう。ところが、中秋節が持つこのようなイメージもその実は明・清代の中秋節の慣習から今に至っているもので、それ以前、中秋節の習慣が社会に根づいてくる宋代においての中秋節観月の様子は現在のとは少々異なっているような気がする。その詳細を見れば、様子は大きく兩種に分けてみることができ、その一つは、主に王侯貴族や富貴の家庭において、屋敷内にあずまやを飾り立てて豊かな宴席を設け、家族を中心に親戚・親友がともに集まって飲み食いしながら月見すること、もう一つは、前者のような観月会が許されない庶民たちで、彼らは町の酒屋に席を決めては酒を飲みながら月見をするか、あるいは夜店がでている町の賑やかさを見て回ったりして遊び、子供たちもまたこのような慣習に乗じて夜通し町をはしゃぎまわって遊ぶという過ごし方であるが、全体からみれば前者のような観月会ができるのは少数のみで、大概の人は後者の過ごし方をしたように見受けられる¹⁷⁾。つまり、宋代の中秋節は、満月の日を迎えて観月を名分に、街に出て飲み食いしながら賑やかさを楽しむという態を見せていたものようで、それが明・清代と時代が下るにつれ、各家庭において家族や親友が集まって団欒を願うという性格が強くなり、それに相まって家族がともに集まり団欒の願いを込めて月の神様を拝むという祭日としての色合いも強くなっているものではないかと思われる¹⁸⁾。

(2) 贈答および接待

「明代(1368~1644年)になると、団欒の意味を表す月餅は、中秋節の供え物や民間の贈答品として形作られたようである。……」(祭りの歳時記⑧「中秋節」)

「次日起来，就有人回西瓜月饼都全了，只待分派送人。贾珍吩咐佩凤道：“你请你奶奶看着送

罢，我还有别的事呢。”佩凤答应去了，回了尤氏，尤氏只得——分派遣人送去。……

（賈珍が）翌日起きると、「西瓜も月餅も全部用意ができていて、どこどこへお届けするが指図を待っております。」とうかがいにきました。そこで賈珍は佩鳳に、「奥さまの所に行って、みつくろって送るように頼んでください。おれは別に用事があるから。」といいました。佩鳳は、「かしこまりました」と返事をして、奥さま尤氏のところに行ってお話をしました。尤氏は一々割りふりをして、人に持たせて送っていきました。……」（『紅樓夢』第七十五回「開夜宴異兆發悲音 賞中秋新詞得佳讖」）

節目を迎え、お祝いの意、平素の互いの扶助活動に対する謝意、または関係性の意志表示などの所以にて親戚・親友関係、上下関係などで様々な贈答が行われているが、中秋節を期に行われた贈答品としてはやはり月餅や果物がもっとも一般的であったことは上部引用のごときである。しかし、これもまた明代や清代になってからの中秋節の贈答習慣であって、その前の宋代においては、宮廷という特殊な空間においてだけ行われた慣習として、「三公以下の人々が、鏡や承露盤を献ずる」などのしきたりがあったとする¹⁹⁾。鏡や承露盤などは、そのいずれも実用物というよりは宝器として珍重されるもの。だからこのような品々の贈答が行われるとは、その授受関係が生じる当事者に対する不老長寿への祈りと願い、そしてその子孫に繁栄がもたらされることへの祈りと願いとが込められての贈答になっているといえることができるであろう。

贈答と同じ脈略で解釈できる慣習で接待が取り上げられる。たとえば、

「荏苒光陰，時遇八月中秋到來。史進要和三人説話，約至十五月，來莊上賞月飲酒。先使莊客王四，賈一封請書，直去少華山上，請朱武、陳達、楊春來莊上赴席。……

月日のたつのは早いもの。時はちょうどめぐってきて八月の中秋、史進は三人と話がしたく、十五夜に屋敷の月見の酒宴に誘いました。まず使いの王四に招待状を持たせて少華山に行かせ、朱武、陳達、楊春を屋敷の宴会に招きます。」（『水滸伝』第二回「王教頭私走延安府 九紋龍大鬧史家村²⁰⁾」）

「一日倒了，中秋佳节。士隱家宴已毕，乃又另具一席于书房，却自己步月至庙中来邀雨村。……

いつの間にか中秋節になった。甄士隱は家の宴会を終えた後、特別に書斎のほうに一席を設けて自分自らが葫蘆廟へ出かけて行って賈雨村を招待した。」（『紅樓夢』第七十五回「開夜宴異兆發悲音 賞中秋新詞得佳讖」）

とあるごとく、前の『水滸伝』からの引用においては、史家村の里正をつとめるお家の坊ちゃん史進が、中秋節を向え、ひょんな縁で知遇となった三人の山賊を招待して月見の酒宴を開こうと計画を立てている様子が描かれており、その次の『紅樓夢』からの引用においては、郷里では

ちょっとした権門と言われていた甄家の主人士隱が、中秋のよい日を迎え、平素の好みから、隣の寺院葫蘆廟に寄寓している知人賈雨村を酒宴で接待しようと自らが招待に出かけている様子が描かれているごときものである。

(3) 団円や節閑

「八月十五日祭月。……月餅月果戚屬饋相報。餅有徑二尺者。女婦寧是日、必返其夫家、曰團欒節也。

八月十五日には月を祭る。……月餅や果物を親戚などで贈り合う。月餅は60cmほどの大きさのものもある。女性はこの日里帰りをし、嫁ぎ先にまた戻るが、そのため「團欒の節句」ともいわれる。」（『帝京景物略』「中秋日」）

上記引用の記事から、明・清代、北京を中心にした中秋節の民俗として、嫁いでいる女性が里帰りの里帰りをする習慣が根づいていたこと、そして中秋節が俗に団円節と呼ばれる所以がこの女性の里帰りに由来していることが確かめられる。ところが、このように嫁いだ女性が特定の節日に里帰りをするという慣習は以前からその例が見られるもので、例えば、『夢梁録』巻四「八月²¹⁾」においては、

「八月上旬丁日、太宗孝宗庠崇学、俱行秋丁秋奠礼、秋社日、朝廷及州県差官祭社稷于壇、蓋春祈而秋報也、秋の社日、有士庶家妻女婦外家回、皆以新葫蘆兒、棗兒等為遺、俗諺云、謂之宜良外甥兒之兆耳、……

八月上旬の丁の日、太学、宗学、武学と府州県の学校では、いずれも秋丁の秋奠の礼をとり行う。秋の社日には、朝廷と州県から官員が差し遣わされ、社稷壇で祭祀が行われる。春には豊作を祈願し、秋には感謝をささげるわけである。秋の社日には、士庶の家の妻女は里帰りし、戻ってくる際には、みな新しくとれた葫蘆兒や棗兒を土産とする。俗の諺に、「それでよく子供ができるのだ」という。」

とあり、宋代には八月の社日には、嫁いだ女性が節日を期に里帰りを果たす習俗があった。それが、明・清代に到ってからは、中秋節の節日としての重みが増すにつれ、本来は社日に行われていたこの団欒の慣習が中秋節に行うものへと変化していったものであろう。

さらに、明・清代における中秋節のもう一つ大事な意味として記憶するに値するものが中秋節の節閑としての重要性である。それは、この八月の中秋節を、五月の端午、正月の春節と並んで節閑と呼び慣わし、人に借りていた借金についても元金やその一部、あるいは元金に対する利子を返すなどのことを行う等、人々の年中生活の大事な節目としての作用をはたすものだったこと

である。

3. 節食や玩具

1) 節食

(1) 月餅

「中秋節に月を祭るときには、必ず月餅やくだものがなければならない。月餅はいつごろ生まれたのか諸説があるが、南宋の『武林旧事』（宋代・杭州の繁盛記、周密著、10巻）には、すでに「月餅」という表記が出てくる。その後、明代（1368～1644年）になると、団欒の意味を表す月餅は、中秋節の供え物や民間の贈答品として形作られたようである。

菓子屋が作る月餅は、多くが嫦娥、広寒宮、玉兔などのデザイン、または「中秋快樂」などの縁起のよい言葉を刻んだ月餅の型に、材料や餡を入れて、それを押しつけ、焼きあげたものだ。各地方によって、使う餡や風味が異なるために、月餅の種類は200以上あるといわれる。……」（祭りの歳時記⑧「中秋節」）

「中秋月餅、以前門致美齋者、為京都第一、他処不足食也、至供月、月餅到處皆有、大者尺餘、上繪月宮蟾兔之形、有祭畢而食者、有留至除夕而食者、謂之團圓餅。……」

中秋の月餅で都第一と名高いのは前門の致美齋のものだ。ほかの月餅は食べるに値しない。月に供える時期になると月餅は到るところで売りに出され、大きいものは30cmほどの大きさのものがあ、上には月の宮殿と月ウサギの模様がついている。祭り終わったあとにすぐ食べる人もいるし、大晦日までとっておいて食べる人もいてこれを「団欒餅」という。」（『燕京歳時記』「八月 月餅²²⁾」）

以上、中秋節の節食としてもっとも尊ばれるものは月餅で、これは中秋節の習慣が社会に根づいてくる宋代にもう既に形作られていたものようである。月の神様を祭るにおける供物や珍味として、そして節日に当たった贈答の品物としても欠かすことのできなかつたもので、材料になる餡の違いによる風味の多様さのみならず、大きさやデザインにおいても様々なバリエーションをもつものであることがわかる。節日の前後に街のいたる所で商品として売られるといたものであるが、裕福な家庭においては特別にお菓子専門の料理人を迎えて節食としての月餅をこしらえていたりもしていた²³⁾。

(2) 西瓜および新酒、新果

「八月十五日祭月。其祭菓餅必円、分瓜必牙錯瓣刻之如蓮華。……」

八月十五日には月を祭る。この時に供えられる菓子や果物はすべて丸いもので、瓜はギザギザに刃物を入れ蓮の花の形に切られる。」（『帝京景物略』「中秋日」）

「そもそも中秋には月に西瓜を供える。それは必ず不斉形に切り、蓮花の花弁の形のごとくにする。」（『燕京歳時記』「八月 蓮弁西瓜²⁴⁾」）

中秋節の節食として、もう一つ貴重な地位を占めるものに西瓜があげられる。西瓜は月を祀る供物として欠かさず登場しているが、それは明・清代の中秋節がもっぱら家族の団円の祈願に重きを置いていたことに関連するようで、西瓜は本来形が丸くて十五夜のお月さまの体現のような象徴的な意味を兼ね備えていること、さらにそのスイカに包丁でギザギザ模様を入れることにより、それがちょうど月の神様の「月光遍照菩薩」、または菩薩像をしている「太陰聖君」の像のイメージに合致してくることによるようである²⁵⁾。

西瓜以外に、この時期にはちょうど清酒の酒蔵の封切が行われ、売りに出す店は華々しく迎新の飾りをして客を迎え入れていたこと、そして時節柄、市場において秋果物の初ものが続々と売りはじめられていたことと関連してそれらを節食として楽しむようになっていた²⁶⁾。

2) 玩具

「毎年中秋になると、器用な商人は黄土で蟾（蝓）や兎の像をこねまるめて作り、これを売りに出す。これを免兎爺という。衣冠を着け、傘蓋をさして繻旗^{ちゆうき}をさしているものもある。あるいは虎に騎るものもあり、あるいは黙坐しているものもある。大なるものは、三尺、小なるものは一尺余りである。その他の意匠技芸〔をこらした〕ものも、工人は美しいものなら備えざるはない。〔かかることは〕けだし、また諧謔にして酷虐なる〔感のある〕ものである。（『燕京歳時記』「八月 免兎爺攤子²⁷⁾」）

上は清代の中秋節の時期に子供たちが持って遊ぶ玩具として街で売りに出されていた免兎爺について述べている記事である。中国においては古くからの伝承として月には蟾蜍と兎が住んでいるといい、それに因んでお月さまを蟾兔と呼んだり、また両者を月の精としてあがめて親しんできているが、この伝承をモチーフに器用な職人が腕を尽くして玩具に作り上げ、それを街で売っていたのであるが、大きいものは一メートルもあり、意匠が凝らされて作られていたものである。

以上、中国における中秋節慣習を主題に、中国における中秋節慣習の起りは、農工と関連して春の豊穰祈願に対する秋の収穫感謝の祭事に求められ、これが八月の十五夜の日を祝う節日として定着するのは宋代になってからのこと、その後、時間の推移とともにこの中秋節の節日としての重みが次第に増していき、明・清代には三大名節として数えられ現在に至っ

ていることが確かめられた。そしてこの節日は何よりも十五夜の満月の円満さにあやかって家族の団欒を願う祭日としての性格が強く、さらに若い男女の間には、夜の縁結びの神様といわれる「月下老人」に対するイメージに因んで縁結びに祈願を寄せる俗信的遊びが存在すること、そしてこの節日の慣習としては家族・親族や親友を中心に管弦楽を添えての観月会が楽しまれ、贈答や接待が行われ、またこの日は女性の里帰りの祝日として、年中生活の大きな区切り目の祝日として考えられていたこと、さらには、月餅や西瓜などの節食や兔耳爺などの玩具がこしらえられることにより、この日の満月を祝う日としての特色が強く表れることなど、中国で守られている中秋節の節日としての面貌の詳細が探索できた。秋収穫の初ものが手に入るよき時節において、さらには事物を顕現させる昼間の太陽に相對し、眠りと死が深く潜在する暗い夜間を照らす最も明るい天然光源体なる月が明るく顔を出すこの日。だからこそ人々は秋の収穫に対する神への感謝の思いをこの日に寄せるようになり、と同時に他の節日を凌駕する名節としてこの日を尊ぶようになっていっているのであるが、考えてみればこれは如何にも人の情の自然な流れに沿うものとして肯じられるものではないか。

注

- 1) 『中国百科』改訂版 小島晋治他編著 大修館書店 1997年 P216
- 2) 『韓国伝統文化事典』 国立国語院編 教育出版 2006年 P293
- 3) 『年中行事事典』 田中宣一・宮田登編 三省堂 1999年 P304
- 4) 祭りの歳時記⑧「中秋節」 〈人民中国〉インターネット版 2005年8月
<http://www.peoplechina.com.cn/maindoc/html/200508/festival.htm>
- 5) 前掲書
- 6) 『中国社会風俗史』 秋田成明編訳 平凡社東洋文庫151 P186
- 7) 『東京夢華録』 [宋] 孟元老 中華書局 1982年 P215
- 8) 『夢梁録』 [宋] 吳自牧 中華書局 1985 P25
- 9) 前述「1）来歴」の部を参照
- 10) 前掲書
- 11) 『燕京歳時記』 敦崇著 小野勝年訳 平凡社東洋文庫83 P154
- 12) 『帝京景物略』 [明] 劉侗 『説郭』続編 ([明]陶宗儀等編 上海戸籍出版社 1988年 P1343) 所収
- 13) 前掲書
- 14) 「定婚店」(『続玄怪録』[唐]李復言撰：『唐人小説』 汪辟疆 上海戸籍出版社 1978年 P268) 所収
- 15) 『中国人の生活と文化』 朱恵良著 二玄社 1994年 P24
- 16) 『紅樓夢』 [清]曹雪芹 高鄂著 上海戸籍出版社 2003年 P546
- 17) 前述「2）宋代の中秋節」の部を参照
- 18) 満月日を迎えて、観月を名分に、街に出て飲み食いしながら賑やかさを楽しむという態とちなみ、時

節を楽しみ悦ぶ行事として、地方ごとにその地方ならではの遊びや習慣も行われている。中秋の節日のいろどりを添えるためにたくさんの灯火をともし、月光を助勢して中秋を祝うだとか（江蘇省や浙江省）、月とともに香り高い木犀をめぐるだとか（四川省の新都）、天地を震わせて岸に激突する大潮を見るだとか（浙江省の銭塘江）などがこれに相当するものである。

- 19) 前述「1）来歴」の部、『中国社会風俗史』第十七章「祝日」の引用記事を参照

20) 『水滸伝』【元末・明初】施耐庵 羅貫中著 上海戸籍出版社 1988年 P15

21) 前掲書

22) 前掲書

- 23) 「贾母又道：“你昨日送来的月饼好。西瓜看着倒好，打开却也不怎么样。”贾珍陪笑道：“月饼是新来的一个饽饽厨子，我试了试果然好，才敢做了孝敬来的。西瓜往年都还可以，不知今年怎么就不好了。”贾政道：“大约今年雨水太勤之过。”……

賈母（ご隠居さま）がまた、「あんたが昨日届けてくれた月餅はおいしかった。でも西瓜は見た目良かったが、割ってみたらそれほどでもなかったね。」と言われ、賈珍は、「月餅は今度新規に抱えたお菓子専門の料理人に、わたしが試しに作られてみたら確かにおいしかったので作らせてさし上げましたものでございます。西瓜は昨年まではずっとよかったです、今年はどうしてそれほどでもなくなってしまったのでしょうか。」という、賈政が、「たぶん今年は雨が多かったせいだろうね。」と話した。（『紅樓夢』第七十五回「開夜宴異兆發悲音 賞中秋新詞得佳識」）

24) 前掲書

- 25) 前述「(1) 月を祀る」の部を参照

26) 「中秋節前。諸店皆売新酒。重新結絡門面綵樓。花頭画竿。醉仙錦旆。市人争飲。至午未間。家家無酒。拽下望子。是時螯蟹新出。石榴、榴勃、梨、棗、栗、李菊、弄色椶橘。皆新上市。

中秋節の前に、もろもろの酒店が新酒を売る。店の表のアーチを新たに立て直し、先を花で飾った色塗りの竿に「酔える仙人」の絵を描いた錦の旗を立てると、町の人々が争って飲みに行く。昼過ぎごろになって、その店も酒がなくなると看板を下ろす。この頃蟹の初ものがでる。石榴、カリン、梨、棗、栗、ブドウ、色づき始めたミカンなどの初ものも市場で売られる。（『東京夢華録』卷之八「中秋」）

27) 前掲書